

今年のスケジュール

5. 18 (日) am 10:00～自然観察と「食草を植えよう！」
6. 7 (土) pm 1:00～ムカシトンボとマダラヤンマのお話
講師 安藤裕先生
6. 15 (日) am 10:00～自然観察会「古代の巨大ムカシトンボを作ってみよう」
7. 20 (日) am 10:00～自然観察会「標本をつくろう！」
7. 26 (土) pm 1:00～科学の不思議 岩国市の岸村進先生
が楽しい工作を教えてください。
8. 1, 2, 8, 9, 22, 23日 (金)(土) pm 8:00～
夜間昆虫観察会 懐中電灯・カメラなど持参
8. 1～9. 30 昆虫資料館の周りの植物写真展 自然に親しむ会 ↘
8月 講演会10日(日) am 10:00～ 講師 矢島千代子先生
9. 21 (日) am 10:00～自然観察会
pm 1:30～ 恒例丸川尚子さん 歌のコンサート
10. 19 (日) pm 1:30～ 写生大会 子供も大人も好きなものを書いてみよう。簡単な画材は用意しますが、できるだけ好きな画材をお持ちください。
11. 9 (日) ありがとう会 11:00～ 懇親会です。

★ ご参加は午前だけでも 午後だけでもご自由にどうぞ。

★ 昼食はご持参ください。

お問い合わせ (電話 0268-37-3988)

山田靖昆虫画に携わって

信州昆虫資料館主事 野原未知

はじめて山田靖氏の存在を知ったのは、2006年秋のことだった。

顧問の安藤先生が、甥の後藤靖さんから送られてきたからと、中国新聞を持参された。そこには、大正7年生まれの子山田さんと、作品(さまざまな昆虫が描かれていた)がカラーで載っており、長年昆虫をたくさん描いてきたこと、自宅の前に家屋を建てて、私設美術館にしていたこともあったが、高齢のためままならず閉鎖。その後は展示するあてもなく、どこかで引き受けてくれるところはないだろうか・・・といったような記事だった。代表小川原先生も、安藤先生も私も、一枚の新聞に載っている絵に惹きつけられた。思えばそれが山田作品との出会いだったと思う。

「ともあれ絵がどういう状況にあるかを見てくるように」と言われ、旅立ったのは11月はじめ。中国新聞玖珂支局長さんに紹介していただき、お尋ねした山田さんのお宅では、ご本人と奥様と娘さんが歓迎してくださった。家は、瀬越(おそごえ)という小さな部落にあり、昔の農家の作りをそのまま残し、屋根は赤い瓦に葺き替えられていたが、以前は茅葺だったであろうことが容易に想像できた。家の前には小川が流れ、集落全体がタイムスリップしたような長州の山村スポットで、それはのちに観た、山田さんの絵に出てくる風景のとおりだった。

さて、部屋に掛けられていたのは数枚の見事な原画で、お茶をいただきながら歓談。こうやってご自分の絵を愉しまれていることを報告の第一にして帰途につくことを思い始めていたとき、ふと隣の暗い部屋の隅に雑然と積まれている紙の山が目についた。「ん?」・・・失礼ながら近寄って湿った埃をはらってみると、それはすべて虫の絵だった。家の前の私設美術館に飾っておいたものを下げたままになっていたらしい。ベニヤと絵を糊で接着し、ビニールをかぶせて4枚ずつ連にしてあった。糊の劣化、ビニールの中で蒸れた紙の劣化で再生も危ぶまれる状態になっていた。さらに紙のまま下積みになっていた作品は、引っ張るとぼろぼろ破れてしまう。湿った埃は手を真っ黒に染めた。山田さんを見ると、なんととも所在無い顔をしておられる。奥様は体調が思わしくなく、娘さんが時折隣町からお手伝いに来ているという。山田さんご本人もやっと歩いているような状態で、高齢のせいか元気がないようにお見受けした。

どうしたものか思案の末、せめて劣化の激しいものだけでも預らせて頂けないか話をしたところ、快く任せてくださるお返事。さっそくそれらを段ボール箱に入れて長野県の我が館に送った。できるだけ修復して必ずお返しにきますと約束し、山田さん宅を後にした。さて、山田さん宅は、山口県玖珂郡周東町瀬越桧余地という所であった。現在は岩国市に合併し、玖珂郡という呼び名は消えてしまったが、長州の歴史をひもとけばさまざまな香りがしてくることだろう。

せっかく遠い岩国まで来たのだからと、名勝「錦帯橋」を見、ホテルに泊まって帰途につ

いた。錦帯橋は錦川に掛かる5連の反り橋で、1673年（延宝元年）第3代岩国藩主、吉川広嘉によって創建され、大型台風などで流失による架け替えや補修が施されながら現在に至っている。桜の大木が並び、吉川家公園を見ながらロープウェイで山頂に上がると、岩国城に至る。その風情を楽しめるようになったのは、足掛け2年ののちの、この春の岩国展を終わらせた後であったことは言うまでもない。

館に戻ってからの一ヶ月半は、ひたすら補修作業にかかった。埃を取り、乾燥し、糊を剥がし、テープ跡を目立たなくし、練り消しゴムで汚れを取る。などなど、状態によってさまざまな手法を用いる。なんとか再生したものをお届けにあがったのは、12月も暮れが迫ったころだった。ただ宅急便で送っても、また山に積まれてしまうのではないだろうかの不安もあり、今後どうしたいかの話もしたかったので、館協力者の宮本さん、大川さんと共に車で行った。きれいになった作品を見て、山田さんはとても喜んでくださった。が、奥様は入院して家にはおられず、ひとりでコタツに向かって絵筆を動かしておられた。余計なことだが、山田さんご自身の寝食も心配になるような冬だった。山のような夥しい数の作品を、誰がどうすることもできない。

ときに、遠い長野県の山の中の昆虫資料館だが、それでも良ければ、山田さんの展示場を設ける気持ちが館のオーナーにはあること、とても作品を評価していることをお話すると、あれもこれもと、次々と作品を提供された。そして寄贈の意思を固めてくださった。作品というものは、誰が所有しようがしまいが、著作権も版權もご本人にある。ともかく作品を風化させないこと、より多くの人々の記憶に留めるべく、誰かが動かねばならない。それがこのたびの私の役割だったのかもしれない。私たちは、山田さんと固い握手をし、作品を車に乗せて帰館した。いまだに正確な距離を把握してないのだが、長州と信州を結ぶ高速道路の往来は簡単なものではない。作品を載せていると思うと、絶対事故を起こしてはならない！の緊張感で、更に倍にも感じたものだった。

その道中、心に刻んだことがある。それは、「山田さんがご健在なうちに、どうしても岩国で展覧会を開こう！」という自分自身に課した命題だった。帰ると、小川原先生が「ご苦労だった！よく行って来てくれた」と私たちを労ってくださいました。顧問の安藤教授も喜んでくださった。そしてみんなで山田さんの絵を囲んで語り合うも、すぐに年は暮れて2007年を迎えた。次の課題は、新たに持ち帰った数百枚の作品の保護と額装だった。そして、館内に山田展示室を作ることだった。

館は、冬期は雪と氷で覆われる。毎年4月中旬すぎから11月いっぱいまで開いて休館になるが、そのあいだも作業は少しずつ進んだ。作品の昆虫たちの正確な同定を担ってくださったのは、当時多摩動物公園の小林俊樹先生だった。そして、8月1日、山田靖昆虫絵画展示室がオープンした。オープンまでの作業には、宮本、栗原、堀場、大川、馬島、西川、中条、小山、桜田、奥村、宮下、池田、武井、秋田諸氏が、携わってくださったことを銘記

しておきたい。夏休みに入っていたので、入場者も多く好評を得た。特に子供たちは、僕も！私も！と、たくさんの絵を残してくれたことはいうまでもない。

さて、課題は終わってはいなかった。少し暇になった秋のころ、私は三回目の岩国に向かうため新幹線に飛び乗った。岩国の教育委員会の方に、山田作品のお話と報告をし、ご了承いただくためだった。いずれ岩国で展覧会をとという想いも伝えたかった。長旅なので、京都に住む友人を誘って行った。彼女は高校の同級生で、いまも続いている数少ない友人のひとり、少なからず勝手に信じている。あらかじめ電話で用件を伝えてあるとはいえ、たったひとりで公のビルに入っていく元気は、実はない。公の組織というものに馴染みがないため、変に緊張してしまうのは、私だけだろうか。

ともあれ友人と二人で、科学センターに行き所長の石本氏に会う。氏は穏やかなまなざしの方で、快く話を聞いてくださり、教育委員会のビルにも案内して下さった。

関係の課の森本氏、北川氏ほかみなさんに挨拶をし、ひととおりお話を聞いていただき、ほっとして外に出たが、きっとどこのどいつだ？と不審に思われたのではないだろうか、後々になればなるほど手に汗を握る想いであった。周東支所にも顔を出させていただいた。支所長の南谷氏と会うことができた。目的を果たし、山田さんの顔を見にいくと、同じ格好でコタツにむかって筆を握っていた。そのこと意外、眼中になし。いい姿だ。案ずることなかれ、愉しみなさい・・・すべては開かれている・・・そんな声が聴こえて、しみじみ岩国の空を眺めることになる。

2007年も暮れて、2008年を迎える頃には、80枚の展示分のほかかなりの作品の埃を払い、額装も進んだ。あれやこれやとシュミレーションを重ねていたので、展覧会のイメージは8割方できた。青木村郷土美術館の館長桜田氏の申し入れもあり、村教育委員会との共催で3月1日から16日まで美術館に於いて、山田靖昆虫画展覧会を開催した。

上田駅から西方の山麓の村に向かって、国道143号線が一直線に走る。カーブもなければY字の分岐もない。なぜこんなに真っ直ぐなのか聴いたところ、以前は電車が走っていたためと説明された。同じ電車線でも上田駅から別所に向かう別所線は、利用する地域を巡りめぐって迂回したりカーブもしている。道路とか線路というものは、そういうものだろうと思っていたのだが、さすが義民の村里に行く道というものかと、見当違いに感心したものだ。幕藩体制の天和2年(1682)、庄屋の不当利益により村人が苦しんでいるのを見かねた人が、上田藩主に直訴したのがはじまりで、その後4回の百姓一揆を起こしている。宝暦11年(1761)には、1万人の村人が上田城に押しかけたそう。直訴の結末は処刑である。処刑を覚悟で不正に立ち向かう正義感と、自主独立の精神は、時代背景から言っても並々ならぬことだろう。後々、その人たちは義民と呼ばれ大切に祭られている。青木村義民太鼓も結成され、その揚々たる音を響かせている。青木村から一直線に突っ走る車道を見てその精神を連想したのも、あながち見当違いと言えなくもない。

そのような村の入り口から右手に鎌倉時代末期に立てられた国宝大宝寺がある。「見かえりの塔」と呼ばれるほど美しい三重の塔のすぐ側に、美術館がある。会期中、500人以上のみなさんが、次々と訪れて作品を観ていかれた。村の有線放送、上田ケーブルテレビ、各誌の力に依るところが大きかった。ギャラリートークには、小岩井教育長がご挨拶に来てくださり、安藤先生の説明や小川原先生のお話もあり、まだ寒い季節だったが大勢の参加者の皆さんと、熱い時間を過ごした。村長さんも何度も足を運んでくださった。

岩国科学センターの石本氏とは、その間にも準備を進めており、青木展終了と同時に、25日から4月3日の岩国展にむけてのイメージを固めた。ありがたいことに、佐久パラダ昆虫館のフェアブルおじさん井出勝久氏が、岩国展のために絵と同じ種類の標本をたくさんプレゼントしてくださった。22日にはそれらも積んで馬島、奥村氏と共に出発した。

「信州から岩国へ 山田靖昆虫画 里帰り展」

岩国駅から徒歩10分ほどで、市民会館に着く。会場には260点ほどの作品を飾る。

昆虫画のみでなく、当時の農村風景や、働く人々の姿を描いたものも並べた。また、額に入っていない作品のファイルも、テーブルに並んだ。青木村展の様子も飾った。

飾りつけには、科学センターの皆さん、教育委員会の皆さん、我々3人と、総勢15、6人になったか。広い会場が作品で埋まっていく。ギャラリースポットライトが絵をさらに引き立てる。岩国市教育委員会主催の山田さんの祭りが始まった。

初日25日から市民の皆さんが、途切れなく来場。受付では常時、科学センターの石本氏や錦川環境教育学会の岸村氏、そして藤井氏、守川氏、弘中氏らと共にすごした。初日を見届けて馬島氏は帰った。3月28日には、長野から昆虫資料館顧問安藤裕先生が、仲間の宮原氏、竹内氏とともに到着。翌29日は、市民会館2階のホールで安藤先生の講演会と、山田さんのギャラリートークだった。展示室は、多くの参加者とマスコミ各誌、テレビ局で賑わっていた。そこへ、山田さんが自力で歩いて登場。会場に感慨深く立つ翁。

山田さんは、ふと慈母観音の絵の前に立った。そこから動かない。その絵は狩野芳崖の絵を模写した縦2メートルの大作で、今回、本人のたつての希望で展示した。生まれた土地と家と農業を守り、妻を得、子を育て、目の前に居る小さな虫達や花を描き、その労働の様子や集落の風景を描いてきた。圧倒的に昆虫画が多い。その観察眼は尋常でなく、種類も多岐にわたる。よくぞこれだけ描き続けたものだ・・誰もが唸る。本人は淡々とあまり感情を現さない。こういう人の瞳は深くしかも澄んでいる。その山田さんが、慈母観音の絵の前では口数が増えた。苦勞して描きあげたそうだ。よほど嬉しかったに違いない。たくさんの虫の絵で埋められた会場の中央に、大作1点。入り口からも見えるように配置した。虫のいのちも人のいのちも慈しんで見守る観音様。私にはそう見えていた。山田さんもそう思って

描いていたのかもしれない。それを確かめる会話はしなかった。声は聴こえていた。

講演会は、先ず教育長磯野恭子氏のご挨拶を頂いた。今回の展覧会に至るいきさつを高く評価されたばかりか、「地元に住ながら・・・」と謙遜され、かえって申し訳ない気持ちになった。あしかけ2年のうちにここまで持ってきた理由は、先ずは作品の保護だった。そして、高齢の山田さんがお元気に歩けるうちに展覧会場に立つていただくことばかりをイメージしていたため、教育委員会への挨拶が遅くなってしまったようにも思う。山田さんと交流が始まった時点で、相談をかけるべきだったのではないかと。ただ、作品を戴く格好になる時期に玖珂郡周東町は岩国市に合併。市長選もあり、基地問題でも揺れていた。ニュースなどで、岩国の話題が出ると耳をダンボにしていた。「大変な事態を抱えている」様子を感じていても、昆虫画のお話をしに行こうという発想が浮かばなかったのが、本当のところだった。

安藤先生は、山田昆虫画作品の確かさなど、ファーブルが文章で昆虫の生態を紹介したように、山田さんは絵でそれをやった「日本のファーブル」とお話された。山田さんはステージ下の脇で私と並び、講演を聴いた。聴衆には山田さんの娘さんや、ご親戚、近所の方もたくさんおられた。絵に関心を寄せる岩国の皆さんの熱い想いが会場全体を包み込んでいた。講演終了後、展示室において車椅子の山田さんと安藤先生は、全作品を見ながら説明をされた。大勢の人たちが取り囲んで熱心に聴いた。マスコミの方々も、ずっと最後まで会場にいて、取材しておられた。時に、山田さんはこの2月で90歳になられた。安藤先生は85歳である。人は、好きなことにむかうと疲れを知らない子供のようになるが、ここでもそれは発揮された。何よりの教育の姿だと感じた。ありがたい姿だった。

そうはいつでも、お二人ともさぞお疲れになったことと思う。

山田さんはそのまま帰られた。寝込んではいないかと心配になって、翌日こっそり山田さんを訪ねたわけだが、翁はいつもの青い半纏を着て、いつものようにコタツに向かい、なんと絵筆を握っていた。山田さん！ブラボー！！

山田さんが会場を去った後、私達信州人一行は教育長さんに招いていただき、岩国スタッフの皆さんと共にお酒を呑んだ。女性の教育長さんは、お忙しい身でありながらも本当に細やかな対応をしてくださり、岩国が世界に誇る銘酒「獺祭」を持ってきてくださった。このお酒は、山田さんの住む獺越地域にある酒造会社で作っている。獺(かわうそ)の祭と書く。お酒の味などたいして分からない私にも、このお酒だけは天下一と感じる。実はこのお酒、それまでにも何回か載いて信州でこっそり呑んでいた。

山田さんの絵を見ながら杯を重ねていると、いつしか昭和の風景のなかに溶けていく。丘のような山に、林や森が続く。小川が流れ水田を潤す。日は傾いて月が登る。月夜の晩に獺たちがそれぞれに獲った魚を持ち寄って、宴会を繰り広げる・・・ひょっとしたら山田さん、

若いころにはその宴会に交じっていたのでは?とも思える。漢字2文字だけでもこんなに想像力を掻き立てられる。獺はいまだに見たことがないが、昔読んだ本に河童は実は獺だったと書いてあったように思う。その「獺祭」の地で、山田靖昆虫画展真最中の月夜の晩に、岩国の皆さんと信州人がはじめて会ったその日に杯を汲み交わす場は、みんなが獺に見えた。心優しい宴であった。

翌日、長野勢4人が帰り、いよいよ私一人が残った。最終日の4月3日まで、あと5日。まだまだたっぷり見ていただける。何度も見に来られた親子連れ、名残惜しそうに半日かけて観ていかれる人たち、本当に大勢の皆さんが足を運んでくださった。教育委員会の力は大い。マスコミの皆さんも、とても好意的にこの展覧会を扱ってくださった。メディアの力も大きい。各誌やテレビを見てこられた方々がとても多かった。すばらしい関係プレーと、すばらしい市民の皆さんの姿に触れた。感謝に堪えない。西岩国駅の駅舎ギャラリーを運営しているNPOの錦生氏、となりの和木町の海井氏、画家の島崎氏とも歓談の機会をいただいた。それぞれに山田作品の展示を考えてくださっていた。ほんとうに嬉しく、そのまま必要な枚数をお預けしようかとも考えたが、未整理の作品もかなりあり、データに残すべき作業に時間が必要なので、改めて時期や展示方法の話し合いをすることにした。両会場とも見に行ったが、ともにいいスペースだった。多くの人に見ていただくためのお手伝い、これからの課題となるだろう。

街はいつのまにか桜色になり、4月3日で10日間の会期が終わった。

800人以上の来場者で全日賑わった。アンケートには、展覧会の感想や深い想いがびっしりと記されていた。一枚の絵画の力を思う。共感の深さ、暖かさを思う。この共有した感情を、どうしたらより豊かに広げられるのか……。

作品はすっかり会場に馴染んで、下ろすに偲びない。教育委員会の皆さんが来られて、いっせいに片付けに入った。大勢の力はすごい。見る間に荷作りは終わった。宅急便の人が来てそれを積んでいった。所在なくしている私を見かねて、スタッフの方々が食事会を開いてくださった。みんなの顔が、心に刻まれた。

翌日、残務整理などしながらしばし過ごし、科学センターの皆さんに別れを告げ車に乗った。海辺や錦川のほども少し歩いた。最後に山田さんに別れを告げに行った。

手を握り合う山田さんの瞳がいつそう深くなり、私を労っていた。再会を約束して、いつもの部屋の重いガラス戸を閉めた。玄関を出て集落を見渡し、ゆっくり車に乗った。

エンジンをかけ、ふと見ると、門のところで山田さんが手を振っている。

ひとりで重い戸をあけて、歩いて出てきたのだ。青い半纏がよく似合うと思った。

私は、もう一度手を振って発車した。柔らかな春色の丘に風がそよぎ、バックミラーに映る山田さんがいつまでも手を振っていた。

(2008. 5. 13記)

追記1 このたびの展覧会を主催してくださった、岩国市教育委員会様・青木村教育委員会様に、心より感謝申し上げます。また、岩国市長様、前市長様、青木村村長様、ご多忙の中ご高覧いただき、本当にありがとうございました。

追記2 帰宅したところに科学センターの笠井悦子氏から小さな箱が届きました。中には、「カブトムシ」と「クワガタムシ」の紙細工が入っていました。彼女は、工作が好きでセンターの中のさまざまに工夫の跡が見られます。目ざとく彼女の机の上にあった真っ白な「三葉虫」の紙細工を見つけ、大喜びしていた私への、何よりのお土産でした。若い瀬田さんにもお世話になりました。 ありがとう！

編集後記

おかげさまで、本年春も無事にオープンすることができました。今回の館報は、山田靖昆虫画展のレポートを掲載しました。展示にあたって、事前に昆虫画の種類や名前を同定してくださったのは、多摩動物園におられた小林俊樹先生でした。

昨年立ち上げましたマダラヤンマ保護研究会研究員、竹内きぬ江・永井陪雄・久松日出子・小野 功・早川慶寿氏らの「平成 19 年度上田市天然記念物マダラヤンマ調査報告書」が、塩尻市立自然博物館 紀要第 10 号として発刊されました。7ヶ月の間に26回の調査をされています。地道な基礎研究に頭の下がる思いであります。同館の紀要は、1号から寄贈いただいております。また、館を応援してくださっている神奈川県の木村茂氏の「マダラヤンマの野外における羽化観察」が、「月間むし」no.440.2007ni 掲載されています。佐久パラダ昆虫館の井出勝久氏からは、「佐久市近郊に生息する昆虫たち」(2008 2. 24 現在における最終標本)の貴重なデータをいただきました。昨年当館で発行しました。「カブトムシとクワガタムシ」(安藤裕監修 宮原文男著)も好評を博しています。

また、岩国科学センターから、センター収録、メダカ・ホタル・トンボ等生息調査書、昆虫採集手引きなどをいただきました。標本では、一昨年新たに加わった小泉真人・岡本裕行氏のチョウの展示室の他、昨年中島俊樹氏から寄贈されました標本を、2階展示室の特設コーナーに展示中です。また、本年3月に寄贈いただいた井出氏の標本は、ロビー特設コーナーに展示しています。自然写真家、栗田貞多夫氏からは、写真集「オオムラサキ」を寄贈いただき、上田市の林貞夫氏からは、ハチの研究冊子をいただいております。

各氏に心より感謝申し上げますとともに、より多くの皆様にご高覧いただけますようお願いしております。 過日、若葉の白馬村(ヒメギフチョウ・カタクリ群生地など)を歩いてまいりました。水と緑と光と風、すべてが輝いていました。 本年も館周辺の自然観察会を主に活動が始まりました。蝶の食草を増やしたいと思っています。

ご協力を、よろしく申し上げます。

(の)

